

教育・保育現場で大学の造形表現の学びを活用していくために —石ころアートからその先へ—

真下 賢一¹

要旨

魅力にあふれる造形表現の実践準備をすることは、教育者・保育者に絶えず求められるミッションであろう。筆者は、教材としてすでに古典として位置付けられている「モダン・テクニクの継承」と、教材研究の積み重ねの上で導き出した「新しい造形表現の浸透」とのバランスを見極めつつ、教育者・保育者に多様な造形課題を提供していくことで、現場で表現活動を指導していくための引き出しを充実させていくことに努めている。

その試行錯誤の中で、最近に至って、複数の新しい造形表現から確かな手応えを得ることができている。今回はその中から、「石ころアート」の実践を取り上げる。

「石ころアート」に取り組むことの「ねらい」には、「すべての石ころ（自然物）にはそれぞれ違ったかたちや魅力があることを実感すること」、「素材から直接伝わる、つるつる、ざらざら、冷たい、重い、などの感触を大切にすること」、「石ころの見える角度や配置を変えることで、表現の可能性が無限に広がっていくことを楽しむこと」、三つの要点が練り上げてあり、「石ひろい」から始まり、「制作」を経て、「鑑賞」に至るまでの道筋を、ビジュアル的にも楽しめる実践報告として、3. の中で紹介する。

幼稚園教育要領が「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」で示す「10の姿」の視点との共鳴も意識しつつ、この表現活動が、教育・保育現場でどのように活用できるのか、「振り返りと発展」といったPDCAサイクルも念頭に置いた上で、その在り方を報告する。

キーワード： 造形表現、教育者・保育者、幼稚園教育要領、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

1. はじめに

幼稚園教育要領第1章では、幼稚園教育の基本を、「幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼稚園教育は、学校教育法に規定する目的及び目標を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする」

〔文部科学省 2018：23〕と示した上で、「幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること」、「幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、遊びを通しての指導を中心として第2章に示すねらいが総合的に達成されるようにすること」、「一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導を行うようにすること」〔文部科学省 2018：23〕を重視して教育を行わなければならない、としている。

教育者・保育者には、このことを踏まえ、教育要領が続けて示す、幼稚園教育において

¹ こども教育学部こども教育学科

育みたい資質・能力である「知識及び技能の基礎」、「思考力、判断力、表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」[文部科学省 2018: 45-46]を一体的に育むことができる実践者として活躍してもらいたい。

その手立てとして、筆者は造形表現からのアプローチを試みている。教育者・保育者は、現場で造形表現の指導を展開するために必要な理論を理解し、教材研究を行いながら自ら感じる力を養い、広い視野を持って自由に表現することに取り組んでいかなければならない。そのためには、活動を通して、自らが心から楽しみ、こどもたちの発達に即して豊かな表現活動を援助していけるように、様々な素材や技法に触れながら造形の引き出しを増やしていくことが必要とされる。そのことに対応するため、筆者は、教育要領がさらに示す「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」[文部科学省 2018: 47-48]に着目し、その項目の中から、多様な自己表現へ繋がる手がかりを探ることで教材研究に生かしてきた。具体的には、育ってほしい「10の姿」のうち、特に、「思考力の芽生え」、「自然との関わり・生命尊重」、「豊かな感性と表現」[文部科学省 2018: 59-60, 61-62, 67-68]の三つを、本研究を有意義に展開していくための柱として据えることで、“人間の原初的な喜び・人間だけに与えられた能力”である造形表現に託される役割を深化させていけるよう、考察・実践を続けている。

2. 構想

2.1. 造形表現の実践で期待できること

幼稚園教育要領第2章では、ねらい及び内容の考え方と領域の編成について、「ねらいは、幼稚園教育において育みたい資質・能力を幼児の生活する姿から捉えたものであり、内容は、ねらいを達成するために指導する事項である」[文部科学省 2018: 133]としている。その「ねらい」と「内容」を「幼児の発達の側面から、健康・人間関係・環境・言葉・表現の五つに編成したもの」[文部科学省 2018: 133-135]が五領域となる。1. で取り上げた「10の姿」も、教育・保育目標の中核である五領域が示す指標をもとに設定されたものであり、幼児の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を日常的にチェックできる「目安」となるものである。

筆者が取り組む造形表現の実践は、感性と表現に関する領域「表現」における「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」[文部科学省 2018: 223-237]ことを指標に展開している。その「ねらい」、「内容」、「内容の取扱い」を統合すると、教育者・保育者の示すべきは、“表現に優劣はない、ただ多様性があるのみ”という、ものづくりの原点を忘れずに、“子どもの活動に寄り添い援助していく”姿勢であることに集約できるだろう。

また、幼稚園教育要領第1章での、指導計画の作成と幼児理解に基づいた評価については、その「指導計画の考え方」、「指導計画の作成上の基本的事項」、「指導計画の作成上の留意事項」、「幼児理解に基づいた評価の実施」[文部科学省 2018: 90-116]の内容を十分踏まえた上で、筆者が担当している講義、『保育内容（表現Ⅱ造形）』の中で反映させ、教育者・保育者が表現活動を指導するための在り方に結び付けてきた。特に、采筆が示している「造形表現の指導目標」である「豊かな個性を育てる：幼児の欲求を満足させ、人間形成の基礎を培う」、「想像力の育成：想像力を生かしながら、精神的な活動を通して、感動・

思考する力を培う」、「造形感覚や造形能力の育ち：あらゆる感覚を使いながらものに触れあい、試す遊びから、材料や技術の発見を通して造形感覚や造形能力育む」、「美的な感受性や情操の芽生えを伸ばす：よりよい生活環境の構築につながるような、創造的な感性を育てる」[采畢 2014] といった視点は、本講義の「幼児の造形表現活動を指導するために必要な教材化の視点と支援について」というテーマを練り上げる際に大いに役立てることができた。

このテーマのもと、「乳幼児の表現における発達過程、遊びの考察、コミュニケーションとして遊びについてもグループワークにて考え」、「子どもと接する時に役立つ絵画・造形教材を使って子どもの感性を育み、表現する課程を大切にして自己表現を楽しめる援助方法を考え」、「模擬保育を通して実践力を養いながら」、指導計画の作成へと繋げることを通して、教育者・保育者が、現場で表現活動を指導していくための在り方を探ることに結び付けている。

2.2. 魅力にあふれた造形表現の実践の準備

もう一つ、筆者が担当している講義、『こども造形の基礎Ⅱ』も紹介しておきたい。前述の講義、『保育内容（表現Ⅱ造形）』が、造形表現の指導方法の理解から指導案への具体化を中心に据えた＜理論編＞に相当することに対し、こちらは、さまざまな制作活動を中心に据えた＜実技編＞として多様な造形表現に取り組む内容になっている。講義テーマは「物語性のある作品制作を実践する」ことであり、講義の到達目標の一部として、「造形の指導にあたって必要な子ども造形表現の発達に配慮した教材開発のあり方や評価と指導からより実践的スキルを身につけ、製作活動に結びつけることができる」ことを挙げている。また、講義の目的・概要の一部である「地域連携から造形ワークショップ取り組みや視聴覚教材の開発など作品を紹介し、作品展開や活動方法をグループディスカッションにより考え、製作・展示・発表を行う」ことを積極的に実践している。これらの活動の積み重ねを、3. で紹介する魅力にあふれた造形表現に結実させていく。

通常、講義で取り扱う造形課題は、モダン・テクニクといった基礎的な「造形あそび」が中心で、筆者は、教育者・保育者が現場で表現活動を指導していく際には、「上手下手にこだわらない自由で風通しのよい表現を保障し」、「ものをつくる、という人間の原初的な喜びを味わわせ」、「表現活動がいつでも展開できる場と機会を直接・間接的に提供していく」[真下・川又 2020：124-126] ことが必要であると、別稿でも言及してきた。

ただ、モダン・テクニクは、幼保・小・中での実践の重複も少なくない。それぞれの時期に即して難易度は調整されているが、課題によっては、教育・保育現場での取り組みの際に、「またか」といったマンネリズムが漂うこともある。モダンとは言え、すでに古典として位置付けられている造形表現の継承と、筆者が教材研究の積み重ねの上で導き出した、新しい造形表現の浸透とのバランスを見極めることは、実のところ一番さじ加減が難しい部分である。

その試行錯誤の中で、ここに至って、複数の新しい造形表現から確かな手応えを得ることができている。今回はその中から、ぜひ「石ころアート」の実践を取り上げたい。筆者は教育者であると同時に、石を素材とした彫刻家でもあるので、そちらの経験則も、3. での実践に盛り込むことができたと確信している。

3. 実践

3.1. 対象

「石ころアート」は、鈴鹿大学と鈴鹿大学短期大学部での講義、『こども造形の基礎Ⅱ』半期 15 回の中で提示する造形課題の一つである [真下 2018: 12-13]。この課題には 3 回分の講義数を充てており、2019 年度から 2021 年度までの 3 年間で計 7 クラスにて実践してきた。幼稚園教諭と保育士を目指す 2 年生が対象で、延べ 150 人ほど（再履修による重複有り）の学生が受講し、毎年秋に、講義全体のテーマ「物語性のある作品制作を実践する」に基づいて、自由な雰囲気の中で取り組ませている。

これから写真を交えてその概要を紹介したい。本実践を通して、“教育者・保育者は、幼児の前で率先して物事に楽しみながら取り組む姿を見せること”、“そうすれば活発な環境が自然と構成されていく”という筆者なりの定理の一端でも示すことができれば、と期待しつつ、ここで得た確かな手ごたえを、教育・保育現場での多様な表現活動の指導へと繋げていきたい。

3.2. 制作

ここからは、造形表現活動「石ころアート」の流れを「図表 1. 石ころアートのねらい」→「図表 2. 石ころアートの内容」→「図表 3. 石ころアートの準備物」→「図表 4. 石ころの選定・石ころの着色・石ころの配置」→「図表 5. 石ころの撮影・石ころの鑑賞」→「図表 6. 石ころの造形事例」→「図表 7. 振り返りと発展」の順でまとめたものを示していく。

まず、「図表 1. 石ころアートのねらい」では、本研究を有意義に展開していくために据えた教育要領からの三本の柱、「思考力の芽生え」、「自然との関わり・生命尊重」、「豊かな感性と表現」が、もともと筆者が練り上げたこの造形表現の「ねらい」にどう共鳴しているのか確認しつつ、図表 2. 3. 4. での具体的な表現・鑑賞の手立てへと繋げていく。

特に、「図表 5. 石ころの撮影と石ころの鑑賞」では、「造形表現における情報機器の活用」の実践として、教材としての石ころを介した表現活動の指導の広がりについて考察したい。

そして、「図表 6. 石ころの造形事例」にて、この実践のねらいが結実された多くの作品をタイプ別にまとめたものを示し、「図表 7. 振り返りと発展」で、PDCA サイクルを意識していくことに繋げる。

1	
石ころアート のねらい	・すべての石ころ（自然物）にはそれぞれ違ったかたちや魅力があることを実感する。・・・㉑：「自然との関わり・生命尊重」を反映 ・素材から直接伝わる、つるつる、ざらざら、冷たい、重い、などの感触を大切にする。・・・㉒：「豊かな感性と表現」を反映 ・石ころの見える角度や配置を変えることで、表現の可能性が無限に広がっていくことを楽しむ。・・・㉓：「思考力の芽生え」を反映

図表 1. 石ころアートのねらい

④：「自然との関わり・生命尊重」〔文部科学省 2018：61-62〕

自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。

また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にしたい気持ちをもって関わるようになる。

⑤：「豊かな感性と表現」〔文部科学省 2018：67-68〕

心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

⑥：「思考力の芽生え」〔文部科学省 2018：59-60〕

身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。

また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。

2	
石ころ アート の内容	・自分で石ころを探してくる（直感、好み、何かに見立てる、など）。 ・もともとの石ころのかたちを生かしたデザインや着色を工夫する。 ・流木や枯葉など、他の自然素材との組み合わせも考えてみる。 ・完成させた石ころアートを、いろいろと並べてみながら鑑賞し合い、写真に残す。 ・撮影後、大型スクリーンに映すため、実物とはまた別の映像作品としての表現の方法も模索していく。 ・一過性の表現活動で終わらせず、展覧会として完成作品を一般公開することで、教育・保育効果を高める。

図表 2. 石ころアートの内容

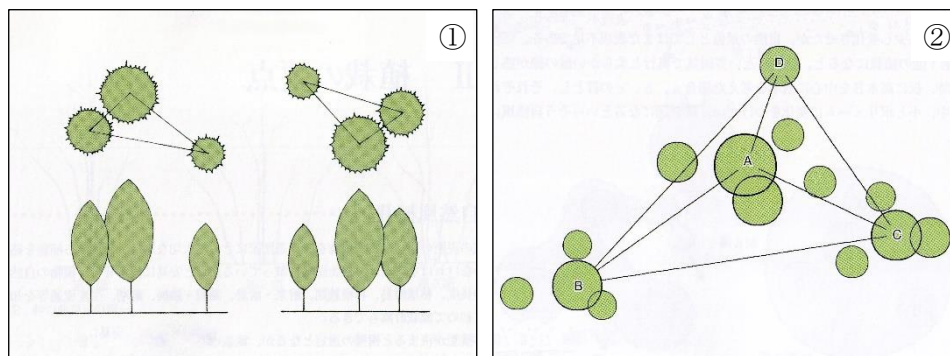
3	
石ころ アート の準備物	・手で持てる程度の複数の石ころ、石を集める袋、他の自然素材、スコープ、散歩の服装、耐水アクリル絵の具、筆類、新聞紙、ドライヤー、デジタルカメラ、プロジェクター、他 ・石ころの採集には、教育者・保育者、保護者が同伴して安全を確保する。

図表 3. 石ころアートの準備物

石ころの
選定
・
石ころの
着色
・
石ころの
配置

【作庭から学ぶ植栽の不等辺三角形】

- ・個性の違う石ころを選定し、着色を経て、効果的な見せ方にたどり着くために、日本庭園の作庭の知恵から多くのヒントを得ることができる。
- ・図面①②／〔秋元 2011：69-71，79-83〕



基本的に、三つを最低の単位とすることで、自然の中にはほとんど存在しない直線配置を回避する。偶数を用いない不等辺三角形の配置が無理なく美しい。

【アクリル絵の具による着色】

- ・着色は、明度・彩度・色相について十分理解していることが望ましい。



水性アクリル絵の具を利用すれば塗りやすく、乾燥後は耐水になる。

【効果的な配置の検討】

- ・視点をを変えることを念頭に、いくつもの見せ方を検討する。



それぞれのスケールがバラバラで、統一感がないことが面白い。



お弁当の中身で一番小さいはずの梅干しが一番大きい。

学生作品

図表 4．石ころの選定・石ころの着色・石ころの配置

我々は、図表 4. で示している「不等辺三角形の配置」や「奇数配置」について、あらためて意識せずとも、“美しいもの”として普段から感覚的に捉えることができています。それは、「黄金比」や「白銀比」に対しても当てはまることで、石ころの様々な配置を検討していく中で、“いいな”と感じる表現を見つけた際、結果的にこれらの配置や比率に近いものになることは頻繁に起こり得る。

ただし、「定石」があるからこそ、「崩し」もまた面白いことを忘れずに、教育者・保育者は、小さな石ころの配置を手がかりに、園庭の遊具や植栽の配置計画などに、自身の想像力を大いに跳躍させることができれば、表現活動の指導の在り方は格段に広がっていくことだろう。

5	
石ころの 撮影 ・ 石ころの 鑑賞 学生作品	【カメラ撮影とスクリーンでの鑑賞】 ・撮影の際は、高低や遠近も意識しつつ、カメラのフォーカス機能なども活用しながら、表現の可能性を探る。 ・同じ配置で視点を変えて何枚も撮影する場合と、一枚ごとに配置を変えて撮影する場合と、それぞれの面白さを体験する。 ・撮影後、大型スクリーンで鑑賞し合うことで、実物とはまた別の、映像作品としての可能性に着目する。
	 視点を下げることで、巨大モアイ像を眺める気分になる。列石としての配置も美しい。

図表 5. 石ころの撮影・石ころの鑑賞

教職課程コアカリキュラムでは、保育内容の指導法（情報機器及び教材の活用を含む。）の全体目標を、「幼稚園教育において育みたい資質・能力を理解し、幼稚園教育要領に示された当該領域のねらい及び内容について背景となる専門領域と関連させて理解を深めるとともに、幼児の発達に即して、主体的・対話的で深い学びが実現する過程を踏まえて具体的な指導場面を想定して保育を構想する方法を身に付ける」〔教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会 2017：8〕と掲げている。

そして、幼稚園教育要領では、「指導計画の作成と幼児理解に基づいた評価」における情報機器の活用として、「幼児期は直接的な体験が重要であることを踏まえ、視聴覚教材やコンピュータなど情報機器を活用する際には、幼稚園生活では得難い体験を補完するなど、幼児の体験との関連を考慮すること」〔文部科学省 2018：108〕と示されている。続けて、「幼児が一見、興味をもっている様子だからといって安易に情報機器を使用することなく、

幼児の直接的な体験との関連を教師は常に念頭に置くことが重要である。その際、教師は幼児の更なる意欲的な活動の展開につながるか、幼児の発達に即しているかどうか、幼児にとって豊かな生活体験として位置付けられるかといった点などを考慮し、情報機器を使用する目的や必要性を自覚しながら、活用していくことが必要である」[文部科学省 2018: 108] と教育者・保育者に説いている。

このことを踏まえ、筆者は、情報機器を活用した教材研究を教育・保育現場での表現活動に生かしていくため、美術館でのワークショップにて、幼児らが気に入った館内の作品を好きな角度からカメラで撮影させ、大スクリーンで鑑賞し合うイベントを実施した〔真下 2020: 3-4〕。この時は、大人と幼児、表現者と鑑賞者、それぞれの立場を通して作品と関わることで、作品に対する目の付け所の違いを楽しむことができ、意外な発見を導き出すことがよく分かった。特に「鑑賞」の観点から、表現活動の指導の引き出しを増やすことができたのは大きな収穫であった。

このような実践の積み重ねが、今回の「石ころアート」における情報機器の活用へとスムーズに繋がった。図表 5. では、石ころの撮影・石ころの鑑賞を、カメラとスクリーンを用いて実践することで、「石ころアート」を、作品が完成した時点で終わらせてしまうことなく、「鑑賞」の活動にまで広げることが可能となった。この成果は、一つの造形課題から無限の表現の可能性を引き出すことに他ならず、直接的な体験としての石ころの造形物と、工夫しながら撮影したカメラの中の造形物は、同じでありながら同じではない、という新たな気づきを幼児に与えることができるだろう。どちらが優れた造形表現か、ということではなく、双方の特徴を認識し、比較することに楽しみを見つけ出す高度な表現体験に身を置くことが大切なのである。

また、スクリーンに映し出された造形物を鑑賞する際に、幼児それぞれが忌憚なく感想を交換することで、自身と他者との表現の違いを確かめ、認め合うことの自覚にまで指導を及ぼせることも期待できる。このことは、当然ながら「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の「10の視点」に連動していける教育・保育活動になることだろう。

6	
石ころの造形事例	【おはじきタイプ】 ・石ころアートの基本形は平面配置。遊具としても活用できる。 



福笑いにしたり、おはじきにしたり、文鎮にしたり、アクセサリーにしたり、お守りにしたり、プレゼントにしたり・・・

【集合タイプ】

- ・平面配置の群像バージョンで、意図のある表現が楽しめる。



みなで同じ方向を眺めているところが面白い。視線の先には何が？



二組の某有名バンドのメンバーによる集合写真。

【行進タイプ】

- ・間隔や順番を変えることで、全く違った表現になるだけに、正解もない。



直線行進、ダラダラ行進、寄り道行進、輪になって踊ったり、増えたり減ったり、派閥ができたり、他人の作品に代打で出演したり・・・

【起き上がりタイプ】

- ・このタイプも基本形だが、立たせることが意外と難しい。
- ・見えない部分に補強を入れて、撮影時に立っていられるように工夫する。



ハロウィンやクリスマスなど、季節ものの人気は高い。

- ・石ころ探しの際、石の方から話しかけてくれることがある。



校庭の片隅で自然石を見つけた時、すでにフクロウやマトリョーシカ以外の何物でもなかった。

【食べ物タイプ】

- ・一番人気の食べ物タイプは、圧倒的に女性制作者の比率が高い。



素材とアイディアの幸せな出会い。



アイスクリーム列石。トッピングは自由自在。



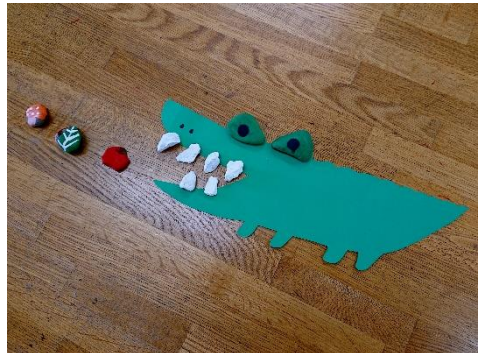
撮影に合わせて、お昼のお弁当箱を洗っておいた。



石に合わせた表現を始めたが、途中から表現に合わせた石を追加した。

【素材コラボタイプ】

- ・ 素材を石だけに限定しないことで、造形表現の幅が格段に広がる。



下に紙を敷くだけで舞台設定ができたり、手軽な自然素材でオーナメントができたり、脇役が主役の石を喰ってしまったり・・・

【屋外放置タイプ】

- ・ 自然石は自然に戻すべきで、誰かが拾ってくれれば制作者の誉れとなる。



石ころの前を通りかかると、昨日と違った配置にいじられていることもあり、それもまた制作者としての誉れとなる。

【創造性の高いタイプ】

- ・ 多くの事例の中から、特に目を引いた作品を選抜した。
- ・ どれも唯一無二の表現で、レイアウト効果も非常に高い。



ここまで 学生作品	単体としての魅力、集合体としての魅力、物語性のある魅力、装飾性のある魅力、遊具性のある魅力・・・
筆者作品	【実用化タイプ】 ・ 自然石をクサビで割って戻しただけで、実用品として利用できる。 照明として使用しない時は、文房具のストッカーとしても使用できる。

図表 6．石ころの造形事例

	7
振り返りと発展	・「石ころアート」に取り組んだ参加者には、「振り返りと発展」を小レポートとしてまとめさせている。 ・「振り返り」では、取り組みの感想や、克服体験が記されることが多い。また、やり切れなかった部分の反省や、今後の課題が記されることがある。 ・「発展」では、自分ならもっとこうしたい、就職先の教育・保育現場で活用したい、などの提案や展望が示されることが多い。

図表 7．振り返りと発展

4. まとめ

4.1. 振り返りと発展から

3. の最後で示した「図表 7. 振り返りと発展」レポートについて、もう少し言及したい。

筆者にとって、参加者からのレポートは、取り組ませた造形課題に対する意識調査を兼ねている。特に、「発展」の項目で寄せられた、「教育・保育現場で活用するにはどのような環境を整えればいいか」、「指導計画や評価に反映させたい」、「親子で参加できるワークショップでの実践は可能か」、「卒業研究（卒業制作）に昇華させたい」などの率直な意見を集約し、造形活動「石ころアート」の取り組みの改善や、その先の新しい造形表現の教材開発に随時反映させていきたい。

また、この「石ころアート」は、筆者が 2021 年度に講師を担当した『教員免許更新講習 幼稚園教諭対象講習Ⅲ【造形コース】』においても、講習テーマ「子どものあそび環境と造形表現」の中で実践する機会に恵まれた。現役の幼稚園教諭や保育士である受講者からは、「園でもこの造形活動を実践したいと思う」、「大学内の様々な造形活動を見学するなど、活動の導入部で興味を引く工夫がされていて参考になった」と本実践を後押ししてくれるコメントが寄せられた。

4.2. 石ころからその先へ

ここで再確認しておきたいが、幼児が容易に取り扱うことができるように、「石ころアート」の大きさは、手のひらサイズに限定しておくべきだろう。もし、幼児が持て余すような重い石を大人があてがってしまうと、この活動の「ねらい」からは外れてしまうからである。石ころといった身近な素材は、散歩ついでに手軽に採集する程度でちょうど良く、ドングリや松ぼっくりを拾うような感覚で、自分だけの特別な石ころを探し当ててもらいたいものである。

教育者・保育者には、想像・創造・感性の翼を広げ、「造形あそび」の視点から石ころのイメージを存分に膨らませてもらいたい。そうすると、自然石を介した「造形あそび」の可能性が、様々な場面にあふれていることに気付くことができる。



三重県菰野町朝来溪谷

事例を挙げておきたい。「三重県菰野町朝来溪谷」では、遠い昔の地殻活動の産物である花崗岩が、長い年月を経て、溪流によって丸みを帯びて優しい姿にかたちを変えた様子を楽しむことができる。溪谷に鎮座する巨石は、石ころアートの大親分のようなものである。幼児にとっては、手で扱える小さな石ころと、巨石の大親分は、どちらも自然からの贈り物

であることに変わらない。このように、屋外活動において日常のスケールを逸脱した自然物に触れることも、幼児の「造形あそび」の大切なきっかけになることだろう。

石ころは、造形表現の小さな素材から、いつの間にか巨石の自然遊具へと役割を変えて幼児の前に姿を現した、という解釈もできようかと思う。

5. おわりに

教育要領では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿は、第2章に示すねらい及び内容に基づく活動全体を通して資質・能力が育まれている幼児の幼稚園修了時の具体的な姿であり、教師が指導を行う際に考慮するものである」[文部科学省 2018: 47-48] ことが示され、「実際の指導では、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿が（教育・保育の）到達すべき目標ではないことや、個別に取り出されて指導されるものではないことに十分留意する必要がある」[文部科学省 2018: 47-48] と言及している。そして、「小学校の教師と幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を手掛かりに子供の姿を共有するなど、幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続を図ることが大切である」[文部科学省 2018: 47-48]と続けている。ここでは、育ってほしい「10の姿」は、日常生活の中で自然に身に付いていく「目安」であり、幼稚園・保育園・認定こども園と小学校との橋渡しとなる「視点」として位置付けられている。

確かに、「10の姿」のうち、2、3の姿だけを偏って扱うことには細心の注意を払う必要がある。その注意に目を瞑ったわけではないが、そのことを踏まえた上で、今回は、造形活動を有意義に展開していくための「トリアージ＝特定の目的のために優先度を定めること」が、とりわけ、ものをつくることの喜び、現場での表現活動の指導、実際の教材研究の深化、などのためには不可欠である、との持論を拠り所に考察・実践を進めてきた。3. で取り組んできた「石ころアート」場合は、取りかかる時点で「10の姿」の中から意識の優先度を設定したものの、この造形活動の熱は、10すべての育ちの姿に、“子どもの活動に寄り添い援助していく”教育者・保育者の姿勢を通して、相乗効果を及ぼすことができるだろう。

なお、3. で詳しく取り上げた「石ころアート」実践のための「ねらい」や「内容」は、2014年に皇學館大学での造形講義をスタートさせた際、シラバス作成と並行して練り上げた。その後、数えきれない「振り返りと発展」行為を繰り返しながら、現在の実践スタイルにたどり着いた。

最後に、4. では、「石ころアート」で培った造形表現の多様性を、次の段階の指導に発展させていくための前置きとして執筆した。今後は、教育・保育現場で大学の造形表現の学びを活用していくために、「こどものあそび」、「あそびと遊具」、「こどものあそびを誘発する彫刻空間」などをテーマとした研究について、教育者・保育者の気づきを促しつつ、考察・実践を進めたいと思う。

参考文献・引用文献

秋元通明（2011）：新 作庭帖，成文堂新光社，69-71，79-83.

教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会（2017）：教職課程コアカリキュラム，8.

(https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/11)

/27/1398442_1_3.pdf) 2022 年 1 月 31 日最終アクセス

真下賢一・川又俊則 (2020) : 小学校における多様性の教育ー図画工作を中心にー, 鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部教職研究 第 1 巻, 124-126.

真下賢一 (2020) : 図画工作科教育の社会への広がりー教室に留まらない活動の展開ー, researchmap, 3-4.

真下賢一 (2018) : プレイ・スカルプチャーの実践「子どものあそびを誘発させる空間の制作・研究」, 三恵社, 12-13.

文部科学省 (2018) : 幼稚園教育要領 (平成 29 年告示) 解説, 23.

(https://www.mext.go.jp/content/1384661_3_3.pdf) 2022 年 1 月 31 日最終アクセス

文部科学省 (2018) : 幼稚園教育要領 (平成 29 年告示) 解説, 45-46.

(https://www.mext.go.jp/content/1384661_3_3.pdf) 2022 年 1 月 31 日最終アクセス

文部科学省 (2018) : 幼稚園教育要領 (平成 29 年告示) 解説, 47-48.

(https://www.mext.go.jp/content/1384661_3_3.pdf) 2022 年 1 月 31 日最終アクセス

文部科学省 (2018) : 幼稚園教育要領 (平成 29 年告示) 解説, 47-48, 59-60, 61-62, 67-68.

(https://www.mext.go.jp/content/1384661_3_3.pdf) 2022 年 1 月 31 日最終アクセス

文部科学省 (2018) : 幼稚園教育要領 (平成 29 年告示) 解説, 59-60.

(https://www.mext.go.jp/content/1384661_3_3.pdf) 2022 年 1 月 31 日最終アクセス

文部科学省 (2018) : 幼稚園教育要領 (平成 29 年告示) 解説, 61-62.

(https://www.mext.go.jp/content/1384661_3_3.pdf) 2022 年 1 月 31 日最終アクセス

文部科学省 (2018) : 幼稚園教育要領 (平成 29 年告示) 解説, 67-68.

(https://www.mext.go.jp/content/1384661_3_3.pdf) 2022 年 1 月 31 日最終アクセス

文部科学省 (2018) : 幼稚園教育要領 (平成 29 年告示) 解説, 90-116.

(https://www.mext.go.jp/content/1384661_3_3.pdf) 2022 年 1 月 31 日最終アクセス

文部科学省 (2018) : 幼稚園教育要領 (平成 29 年告示) 解説, 108.

(https://www.mext.go.jp/content/1384661_3_3.pdf) 2022 年 1 月 31 日最終アクセス

文部科学省 (2018) : 幼稚園教育要領 (平成 29 年告示) 解説, 133-135.

(https://www.mext.go.jp/content/1384661_3_3.pdf) 2022 年 1 月 31 日最終アクセス

文部科学省 (2018) : 幼稚園教育要領 (平成 29 年告示) 解説, 223-237.

(https://www.mext.go.jp/content/1384661_3_3.pdf) 2022 年 1 月 31 日最終アクセス

采筆真澄 (2014) : 保育内容 (造形表現) 講義資料, 中部大学 現代教育学部 幼児教育学科

※全ての写真撮影・提供 : 真下賢一

付記

本稿で使用した学生制作の「石ころの造形事例」などの写真は、「造形関連の講義における課題についての調査・同意書」の署名提出による同意を得た上で掲載している。

同意書の内容を以下に転載する。

造形関連の講義における課題についての調査・同意書

- ・講義名：
- ・教員名： 真下 賢一
- ・開講時期： 年 期（学年 ）
- ・氏名：

- ・制作した各課題の「おもしろさ（興味度）」と「むずかしさ（難易度）」について、該当する箇所に○を付けてください。

課題名	おもしろさ					むずかしさ				
	少		→		多	少		→		多
1.										
2.										
3.（4.以降、転載省略）										

- ・自由記述

- ・本調査の結果を集約し、今後の課題の開発や改善に反映させていただきます。
- ・調査結果とともに、提出課題を「学生作品」として論文等で公表することへの同意をお願いします。
- ・質問紙の提出をもって、調査・公表に同意を得たものと見なします。個人情報の保護の観点から、個人が特定されるような公表は致しません。何卒ご協力の程、よろしくお願い致します。（真下賢一）

こども教育学部こども教育学科 k-mashita@suzuka.ac.jp

In Order to Utilize the Learning of Modeling Expression at the University in the Field of Education and Childcare —From Stone Art to Beyond—

Kenichi MASHITA

Key Word Modeling Expression Educator / Childcare Worker

Kindergarten education guidelines

Children's Qualifications and Abilities that We Want Them to Grow Up by
the end of Early Childhood